



市史へんさん

第 248 号

令和元年 11 月 1 日
小松市史編纂事務局
へんさんだより

公園の木々も彩りよく、すっかり秋の漂いとなりました。今年は 11 月 8 日が立冬です。冬がもう間近ですね。さて、先月開催の市史講座には、大変多くの皆様にご聴講いただき、事務局にとっては、うれしい悲鳴となりました。資料が間に合わなかった聴講者には、ご迷惑をお掛けしましたこと、深くお詫びいたします。

今回は、講演に加え、博物館見学があり、実際の実物資料も見ることができ、充実の 2 時間だったと思います。内容は、「おくのほそ道 330 年」にちなみ、「芭蕉」、「連歌」、そして、来年の大河ドラマとも関連し、「明智光秀」の 3 つをキーワードに、芭蕉が小松の地に残した足跡を紹介しました(下記にその一部を掲載)。この講演内容を念頭に、11 月末にも関連行事がありますので、合わせてぜひご参加ください。



第 90 回 市史講座 『芭蕉の残したもの』

講師 綿拔 豊昭 (筑波大学教授・小松市史専門委員)

「連歌」といえば、江戸期に、トップクラスにいたのが能順であった。能順は、小松天満宮創建時に、初代別当として招かれ、連歌の第一人者でもあった。そのお陰で、小松の地はたちまち連歌の盛んなところとなった。

この能順と芭蕉との対面については、『とはしぐさ』に、その場面が取り上げられている。「芭蕉が能順を尋ねて、能順の句を奉納した際に、“てにをは”が違っていたため能順が不機嫌になり、決裂した」という内容であった。時代背景を見てみると、当時は身分社会で、いくら俳諧で優れていたとはいえ、出生の低い芭蕉と、加賀藩御用達である能順とでは、身分が全く違った。能順は、文化スタッフの重要な位置にいた人物であり、この能順に芭蕉が面会するためには、間を取り持つ仲介者が必要であった。先に商人の堤歆生(カシヨリ)を立てたが、成り立たず、もう一人、禄高のある加賀藩士の万子(マツ)を立て、ようやく対面に漕ぎ着けた。この二人の関係を押さえれば、能順の怒りが文芸的なものばかりでなく、身分社会の中での礼儀という点からも推察される。

このように、当時は、連歌を嗜(カシ)む人には、連歌は俳諧よりも格上だというプライドを持っていた。一方で、俳諧をやっている人には、芭蕉は神様であり、能順が京都北野天満宮出身の身分の高い人であっても、芭蕉がこの世界ではスーパースター、第一人者であった。

かといって、芭蕉が連歌を全く知らなかったわけではない。連歌がわからなければ、俳諧のオリジナリティが出せないものであり、連歌とは違う路線を出すために、「何が基になり、どこを変えるか」という点を押さえるため芭蕉は連歌をきちんと勉強していた。特に、当時の連歌界の第一人者であった宗祇(ソウキ)が好きだったようだ。

今回、博物館では、特別展として、「芭蕉とこまつ」を開催しているが、この中に、芭蕉の真筆と伝えられる、「明智が妻」の句が展示されている。この句を芭蕉が詠んだ光秀の時代を探ると、当時、公家が和歌なら、武士は連歌を嗜むという構図があり、連歌会は武士のもてなしの一つであった。光秀が越前にいた頃、貧乏だったため仲間が来ても連歌会を開くだけの費用がなく、そこで妻が自分の髪を切って売り、その費用で連歌会を開いて、夫光秀は面目を保ったという逸話がある。芭蕉が伊勢参詣の途中、貧しい家の夫婦に暖かいもてなしを受けた際その逸話が思い出され、「明智が妻」の句を詠んだ。

光秀は、足利義昭に仕え、上洛後は、京都の教養人として、名を連ねていた。時に、織田信長上洛の折、尾張の田舎者と言われた信長は、財力は茶道具等を買占めて、威厳を示したが、京都の文化圏の人々との交流には教養人が必須で、光秀の「武士の連歌の嗜み」が必要となり、義昭から引き抜いた。このように光秀と信長の間を語るには、光秀と連歌の関係を押さえないといけない。



講師：綿拔豊昭先生



市史講座アンケートより

【講座はいかがでしたか】

- ・わかりやすかった 16人
- ・ほぼ理解できた 21人
- ・勉強になった 28人
- ・興味深い内容だった 20人
- ・難しい内容だった 10人

【年齢】

- ・80代以上 25人
- ・70代 30人
- ・60代 13人
- ・50代 4人
- ・40代以下 2人

【性別】

- ・男性 63人
- ・女性 37人

<事務局 10月の活動状況>

- ・10月 1・5日 赤瀬町町有文書資料調査
- ・10月 1・10日 災害関係資料調査
- ・10月 3日(木) 近現代部会
- ・10月 3～4日 財政資料調査
- ・10月 5日(土) 龍助町他町有文書資料調査
- ・10月 6日(日) 市史講座
- ・10月 8・12・20日 小松町会議案資料調査
- ・10月 9日(水) 遊女の手紙調査(串茶屋町)
- ・10月 22日(火) 市政関係資料調査

<事務局 11月の活動予定>

- ・11月 10日(日) 考古部会
- ・11月 30日(土) 近現代部会

<11月のカレンダー> 開室時間 10:00～17:00(火～金)／9:00～17:00(土)

日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

* は小松市史編纂事務局が閉室しています。

【ご感想】

- ・講師に馴染みがあるからか、小松市民の俳諧に対する憧憬が深いからか、拝聴者数に驚きである。
- ・「おくのほそ道 330年」を初めて知り、講座で興味が湧いた。イベントにはできる限り参加したい。
- ・芭蕉の実績の話は講演される方が少ないので面白かった。
- ・芭蕉について理解を深めるよい機会だった。
- ・博物館の特別展観覧と合わせて企画していただき有難い。
- ・能順、歓生、北枝、牧童、研屋小路など、大切に伝えていってほしい。

考古部会報告

今年度は、『考古編』が発刊予定で、ただ今執筆中です。

本編の内容は、当市内で発掘された遺跡を、時代別に紹介しますが、「小松の地形の成り立ち」にも注目し、1章を設けます。これは、北陸新幹線敦賀延伸工事で採取された土壌の分析を活用し、加賀三湖の成立時期や変遷を解明しようというプロジェクトの成果です。この調査は、市埋文センターで進められ、さらに、別地点のボーリング調査も行い、その結果がようやくまとめられ、10月末に発表されました。

その報告によると、木場潟の形成は、従来考えられていた時期より2千年以上早く、5300年前と推定しました。また柴山潟は同時期、干拓で埋められた今江潟は約3000年前に形成されたとします。

この結果、弥生時代に、南加賀で採掘された碧玉の運搬に木場潟など加賀三湖が、重要な水上ルートとして確立していたことが確認できました。今回の詳細な報告は『考古編』でも紹介されます。

小松市史編纂事務局（小松市立図書館2階）

- ・住所 〒923-0903 小松市丸の内公園町19 芦城公園内
- ・TEL 0761(24)5315 ・FAX 0761(22)9763
- ・E-mail hensansitu@city.komatsu.lg.jp
- ・URL <https://www.city.komatsu.lg.jp/soshiki/toshokan/shishihensan/index.html>